

王藤内隆盛と曾我物語

日本先史古代研究会会員 大守 隆（大守王藤内家第七十九代当主）

1. 事件の概要

建久4年5月28日（1193年6月28日）の雨の日の深夜、王藤内隆盛は曾我十郎祐成（すけなり）・五郎時致（ときむね）兄弟の仇討ちに巻き込まれ、富士の裾野で死去した。隆盛は大守王藤内家では中興の祖とされている先祖である。

日本三大仇討ち話の一つ（他の二つは「忠臣蔵」と「伊賀越えの敵討ち」）といわれるこの事件を振り返ってみよう。舞台は、富士山の雪解け水が豊富に流れている段丘の付近で、現在の静岡県富士宮市上井出、森と草原が混在している地域である。前年に正式に成立した鎌倉幕府の頼朝政権が、ここで大規模な「巻狩り」を行ったのである。巻き狩りとは野生動物を森から追い立てて射ることで、当時の武器は弓矢であったので、軍事演習を兼ねた一大イベントであった。演習終盤の28日の深夜、事件は発生した。

頼朝政権の高官であった工藤祐経（くどうすけつね）の宿所を王藤内隆盛が泊りがけで尋ねていた。王藤内は、平家に肩入れたとの嫌疑から、領土が没収され、数年間鎌倉で囚人となっていたが、工藤祐経のとりなしで領土を安堵されたことから、そのお礼に来訪したのである。

その日の夕刻、若者が中を覗いているところを警備の者が見つけた。その若者は招き入れられて、工藤祐経と王藤内隆盛が二人の白拍子（遊女）とともに開いていた酒宴に参加した。若者は曾我兄弟の兄の十郎で、工藤祐経の親戚であったが、昔、身内同士の領土争いから、彼の父の河津三郎祐泰（相撲の決まり手の河津掛けの名の由来となったとされる人物）は工藤の手の者に殺されていた。父が非業の死を遂げた後、母が兄弟を連れて曾我太郎祐信という男と再婚したので、兄弟は曾我姓を名乗り、それまで何度も工藤に対する仇討ちの機会をうかがってきた。

工藤祐経は十郎に、父の敵というのは事実無根であり、今後は力になろうと告げた。十郎は内心を隠して盃を受けた。しかし帰りがけに隠れて聞いていると、工藤は十郎の父を昔殺害したことを王藤内に話していた。

戻った十郎は弟と仇討ちの相談をした。そして夜更けに雨の中、兄弟で宿所に押し入った。しかし、宿所には工藤も王藤内もいなかった。そこで近くの頼朝警護の侍所を探すと、そこに工藤と王藤内がそれぞれ白拍子とともに寝ていた。兄弟は、兄が工藤の足側に、弟が頭側に立ち、兄が肩を切りつけてから、名乗りを上げた。工藤は気がついて太刀を取ろうとしたが、兄弟に切り殺された。王藤内も騒ぎに気づいたが兄弟に切れ絶命した。

兄弟が親の敵を討ちとったと大声を上げたので、武士たちが駆けつけてきた。十人の武士が兄弟に殺傷された後、周りが松明などで明るくされた中、新田四郎忠常が出てきた。この巻狩りでも頼朝に向かってきた手負いの大猪にまたがってねじ伏せた豪傑である。十郎は他の武士の介入もあって討ちとられた。

（十郎は畠山重忠の情の下で自刃したとの説もある）。弟の五郎はある武士を追って、頼朝の屋形の大幕を上げて中に入った。中では、騒ぎを聞いて女装して様子をうかがっていた力自慢の五郎丸が油断した五郎に抱きついて取り押さえた。頼朝も騒ぎで目を覚まし太刀を手にとったが側近に制止された。

あくる日、五郎は引き出され、頼朝の直々の尋問を受ける。頼朝は五郎の命を助けようと一度は思ったが、工藤祐経の子息の懇願もあって死罪となった。

備前の王藤内家には、6月13日に領土安堵の吉報が届き、一同が喜んでしたが、23日に、部下が骨をもって帰り、一転して悲しみに暮れた。一方、十郎の妻となった遊女、大磯の虎は出家し、大阪の四天王寺で、ある尼と親しくなる。それが王藤内の妻であった。彼女は王藤内の最期の場所を見せて欲しいと大磯の虎に頼み、一緒に駿河に行った。

2. 現在の状況

この事件は曾我物語や吾妻鏡などで採り上げられたために、記録はかなり残っている。しかし、資料

によって異なる記述もあり、事実が脚色されている可能性もある。また、現地にも多くの跡地が残っている。以下の各所は④の王藤内の墓を除いて、いずれも富士山西麓の観光名所「白糸の滝」（日本観光百選滝の部第1位、軽井沢近辺の同名の滝とは別）から徒歩圏にある。

①音止めの滝（写真1）：曾我兄弟が仇討ちの相談をする際に、この滝の音が大きくうるさいので、静まるように神に祈ったところ音が止まったと伝えられている。白糸の滝に向かう道から左手に真近に見ることができる。この滝の別名は男滝で、女滝とも呼ばれる白糸の滝とは対照的な豪壮な滝（高さ25メートル）である。

②曾我の隠れ岩（写真2）：音止めの滝の上流を左折し、川にかけられた歩道橋を渡り、駐車場を横切って歩くとすぐ右側にある。この岩に曾我兄弟が身を潜めたといわれる。人の身長よりやや高い岩であるが、草の陰にちょうど人が隠れる位の隙間があり、脇の階段を上るとそれが見える。

写真1 音止めの滝



写真2 曾我の隠れ岩



③工藤祐経の墓（写真3）：さらに東に少し行くと、工藤祐経の墓がある。この辺りに宿所があったと言われており、王藤内が殺害されたのもこの近くであると考えられる。小さな赤い祠の奥に土盛がある。東側は高台になっており、明治以降の軍人の墓や再建された忠魂碑が立っている。この丘からは富士山の雄大な姿が望まれる。なお祐経の墓は故郷の伊豆にもあるとの由である。

④王藤内の墓（写真4）：富士見駅の南南西約1.5キロ、星川放水路沿いの道に、自證寺の前からの小道が合流する付近の住宅地の一角、曾根家の小さな墓地の中にある。「歩く博物館、王藤内の墓」という富士宮市の茶色い標識が敷地内に立っている。

写真3 工藤祐経の墓



写真5 王藤内の墓



昭和五十七年八月吉日 曾根一男 建之

脇の碑には以下のように書いてある（句読点は筆者が補った）。

「王藤内の碑 建久四年五月二十八日曾我兄弟に討たれた工藤祐経の客人王藤内の墓が、月乃輪黒田寄りの畑に大きい白椿が二本ありその根本にあった。星山放水路用地内のため移転することになり、之が移転先について郷土史研究で有名な植松先生の助言、大宮町史等の資料に基き、王藤内と関係のあった曾根家先祖の墓所に合祀することになった。曾根家の先祖は源頼朝の馬廻役で、その馬場が月之輪（現在星山橋東側の山裾）にあったと伝えられ、現在の墓所もその一角と考えられる。終戦直後迄は多くの石碑灯籠等があったのを記憶しているが、現在ではその多くを失っている。何れにせよ王藤内も同じ頼朝縁りの者、曾根家の先祖と地下でその居を一にして当時を語り合っておることと思ふ。この史実を将来に伝えることも曾根家の後継者として意義あると考え、この碑を建立し供養する。

3. 二つの疑問

私が疑問に感じた2点を記しておきたい。読者の皆様のお考えもお聞かせいただきたい。

①工藤祐経は何故討たれたのか？…彼は仇討ちの危険を十分に意識したと思われる。仇を恐れて、兄弟を頼朝に処刑させようとしたこともあった。また、五郎が僧侶の修行をしていた箱根山を訪れた際には自分は親族だから後ろ盾になれるとして五郎に赤木の柄の短刀を与え、懐柔を試みている。さらに、八幡七郎に兄弟を討たせようともしている。当日の夕方に十郎が宿所に現れたことから危険は察知できたはずである。では何故討たれてしまったのか？ これに関しては3つの可能性があるように思われる。第1は、頼朝政権も完成し、乱世が終わったのだから、曾我兄弟も新体制の中で役割をみつけて生きていくであろうと考えた可能性である。高官である自分を殺害すれば、兄弟の母が恐れていたように彼らの将来もなくなる。死を覚悟してあだ討ちをするという行動が彼の想像を超えていたのかもしれない。第2は、備前という遠方に帰る客人の王藤内との酒宴を優先したという可能性である。王藤内の往訪の趣旨からすると、二人の白拍子は王藤内が連れていった可能性もあろう。こうしたもてなしを楽しむうちに酔いもあって警戒心が薄れたことも考えられる。なお、祐経は王藤内の助言によって屋形を変えており、それで一安心と考えていた可能性もあろう。

第3の可能性は、事件が黒幕が書いたシナリオに沿って起きたというものである。死者の多さからみても、また頼朝の宿所にも影響が及んだことからみても頼朝に対するクーデターであって、曾我兄弟はいわば利用されたという可能性である。仇討ち事件とされたのはクーデターが失敗したからであるとの見方である。こうした見方をする歴史家が少なくないが、誰が黒幕であったかについては様々な仮説があるようである。

②なぜ第三者の王藤内も殺したのか？…義を重んじる仇討ちにおいて、何故無関係の第三者を巻き込んだのであろうか？兄弟で相談している際に、弟の五郎は王藤内を巻き込むことに関し憐れみの情を述べた。これに対し十郎も逃げるならば許そうと答えていた。また十郎は従者に、本懐を遂げたら急いで自害するとも話していた。王藤内が兄弟の前に立ちはだかって仇討ちを阻止しようとしたのならともかく、二人で祐経を二太刀ずつ切りつけた後に王藤内を殺したり、駆けつけた他の武士と戦ったりしたのは何故であらうか。仮にそれが事実だとしても、物語にそのように書くのであろうか？王藤内が妨害したので殺傷したとの話にするのが普通ではないかと思われる。ただし、上記の第3の説をとれば王藤内は、クーデターの混乱の中で命を落としたということになる。

<参考資料>

「物語の舞台を歩く 曾我物語」坂井 孝一著、山川出版社、2005年

「曾我物語の史実と虚構」坂井 孝一著、吉川弘文館、2000年

「曾我物語(新編日本古典文学全集)」梶原正昭・野中哲照・大津雄一(翻訳)、小学館、2002年

「富士の巻狩と曾我兄弟の仇討ち」富士宮市郷土資料館ホームページ

「浮世絵に見る曾我物語」小田原市「おだわら百科事典」ホームページ